

研究報告

先行経験がその経験に対する認識および集団内葛藤への 対処方略に及ぼす影響

黒 川 光 流

富山大学人文科学研究第 81 号抜刷

2024 年 8 月

研究報告

先行経験がその経験に対する認識および集団内葛藤への 対処方略に及ぼす影響

黒 川 光 流

問 題

メンバー同士で話し合い、集団で一つの結論を出すような課題においては、特定のメンバーだけでなく、メンバー各々が意見や考えを表明しあうことで、結論の説得力や妥当性は高まり、集団としての成果は高まると考えられる。しかしその場合、メンバー全員の意見や考えが常に一致するとは限らず、メンバー間に葛藤が生じることがある。集団課題に直接関わる意見や考えの相異に起因する葛藤を経験することは、メンバーにとって多様な観点の考えに触れる機会となり、集団による意思決定も創造的あるいは効果的になり得ることが示唆されている(Nemeth et al., 2004)。また、互いに納得できるよう議論することで葛藤の解決が図られると、建設的な方向で葛藤が解消されるだけでなく、当事者間の関係が良好になる一方、葛藤への直接的な取り組みが回避されると、メンバーは閉鎖的になり、協働作業が阻害されることが示唆されている(Blake & Mouton, 1964)。すなわち、集団内で生起する葛藤は、それにいかに対処するかによって、集団や各メンバーにポジティブに作用するものにもネガティブに作用するものにもなり得ると考えられる。

他者との葛藤への対処の仕方を集約・整理した葛藤対処方略は、自分の意見や考えを尊重する程度および相手のそれらを尊重する程度、それぞれの高低の組み合わせによって、4から5つに分類される(Blake & Mouton, 1964; Rahim, 1983; Thomas, 1976)。例えば、Thomas(1976)のモデルでは、自分と相手双方の意見や考えを尊重する「協力(collaborative)」, 自分の意見や考えのみを尊重する「主張(competitive)」, 相手の意見や考えのみを尊重する「譲歩(accommodative)」, 自分と相手どちらの意見や考えも尊重しない「回避(avoidant)」, およびどちらも中程度尊重する「妥協(sharing)」の5方略に分類されている。葛藤の解消や集団の成果にとって最も効果的な方略は、この分類の中では協力であることが多くの研究で示されている(e.g., Burke, 1970; Likert & Likert, 1976)。しかし、当事者双方の意見や考えが同時に尊重されるような新たな解決策を見出すのに必要な資源や時間が十分にはない場合、あるいは既にいくつかの選択肢があり、その中から選択しなければならない場合などには、協力的な方略に基づく解決は困難であり、どちらか一方が自分の意見や考えのすべてを採用するか、一部あるいは全部を取り下げる必要がある。つまり、協力が最も望ましい方略であったとしても、状況によっては主張や譲歩、あ

るいは妥協のいずれかしか用いることができないことがある。一方の意見や考えを尊重することは、他方のそれらは尊重しないことであるとの認識は、相手に対する信頼感を低下させる可能性があり (Ross & Stillinger, 1991), このような状況でいかに振る舞うかは、集団や各メンバーに特に大きな影響を及ぼすと考えられる。したがって本研究では、集団内葛藤への対処方略として、主張、妥協、ならびに譲歩しか用いることができない状況に焦点を絞る。

他者との葛藤への対処方略の用い方に影響を及ぼす要因として、葛藤当事者の対人的な動機づけ (本田, 2012), 葛藤相手との関係性 (平井, 2000), あるいは観衆の存在 (福島他, 2006) など、葛藤が生起する以前から各メンバー、メンバー間、あるいは集団内に既に存在する要因が多く検討されてきた。換言すれば、葛藤がどのような集団状況で生じたかによる、対処方略の用いられ方の差異が検討されてきた。しかし、集団内葛藤はメンバー同士の相互作用を介した動的な過程で生起し、解決が図られるものである。その際のメンバーの様態を明らかにするためには、集団に既存の要因だけでなく、集団として活動する過程で直面する要因も合わせて検討する必要がある。特に集団では、他者との間に生起した葛藤に1度対処すれば、その後は葛藤が生じないということはなく、集団で課題に取り組む時間や機会が多くなるほど、葛藤を経験する機会も多くなる。そのような状況では、一連の集団過程において何度か生起する集団内葛藤時の経験が、その後の行動に強く影響すると考えられる。

他者との交渉においては、交渉初期に示された相手からの振る舞いによって、後の振る舞いが異なることが示唆されている (Leng, 1993)。また、囚人のジレンマ状況でも、競争的行動は報復としての競争的行動を、協同的行動は返報としての協同的行動を引き出すことが示されている (Shure et al. 1965)。このように、両者にとっての利益や報酬、あるいは被害や損失が明確な状況では、相手の行動に応じた行動が選択されることは容易に推測できる。しかし、共通の目標の下に課題に取り組んでおり、個々のメンバーにとっての利益や報酬の多寡が明確ではない集団状況で生じた葛藤でも、先に相手から妥協あるいは譲歩を用いられる経験があれば、次の機会には自分も妥協あるいは譲歩を用いようとし、相手から主張を用いられる経験があれば、次の機会には自分も主張を用いようとするのかは、これまでに十分には明らかにされてこなかった。

先行する葛藤時の経験はまた、先行経験に対する認識や感情にも影響を及ぼすことが予想される。交渉状況において、相手の振る舞いに対して腹立たしさを感じると、相手に不利な提案をするようになることが示されている (Baron et al., 1990)。一方、交渉時の自身の行為を申し訳なく思うと、短期的な自己利益を放棄し、相手の意見や考えを尊重するようになることが示されている (Ketelaar & Au, 2003)。このように、先行経験に対する認識や感情は、後続する葛藤時の対処方略の用い方にも影響を及ぼす可能性があるのだが、他者からある葛藤対処方略を用いられることによって、その経験をどのように認識し、またどのような感情が生起するかは、

これまでに十分な検討がなされていない。他者から提供される資源が少ない場合には不公平感や怒りを感じ、多い場合には罪責感を感じやすいことが示されている（中島・吉田，2008）。集団内葛藤時にも同様に、先行する葛藤時に他者から主張を用いられると、公平ではない、腹が立つなどの認識や感情を抱き、先に譲歩を用いられると、申し訳ないなどの認識や感情を経験すると考えられる。したがって本研究では、共通の目標の下で課題に取り組み、各々の利益や報酬の多寡は明確でなく、むしろ全員が共通の成果を得るような集団状況において、集団内の他者からある葛藤対処方略を用いられた経験が、後続する葛藤時に用いる対処方略に及ぼす影響について検討することに加え、先行する葛藤時の経験に対する認識や感情についても探索的に検討することを目的とする。

なお、集団における葛藤は常に同じ相手との間で生起するとは限らず、先行事態と類似した争点で葛藤が生じたとしても、その相手が別の人物であることもある。葛藤の相手が同じであれば、相手からの妥協や譲歩に対して自分も妥協や譲歩、相手からの主張に対して自分も主張という互報的な相互作用は成立しやすいと推測されるが、葛藤の相手が異なる場合に、そのような相互作用は成立するのであろうか。報酬分配状況では、過去にある他者から過少な報酬を受けると、後に別の他者に対して過少な報酬を与えることで不均衡の解消を試みることが示唆されている（Austin & Walster, 1975）。また援助提供状況でも、過去にある他者から援助の提供を受けた経験があると、後に別の他者に対して援助を提供しようとする意図が高まることが示されている（中島・吉田，2008）。このように、明確な資源の分配・提供がなされる状況については、先行事態と後続事態とで相互作用の対象が異なる場合の検討もなされている。しかし先述したように、異なる意見や考えの集約・調整という資源の分配や提供が明確でない状況については、先行する葛藤時の経験が後続する別の他者との葛藤時に用いる対処方略に及ぼす影響は十分に検討されておらず、ある他者との相互作用で生じた不均衡を別の他者との相互作用で解消しようとするのかについても明らかではない。そこで本研究では、先行事態と後続事態とで葛藤の相手が異なる場合でも、ある他者から譲歩を用いられると別の他者に対して譲歩を用い、ある他者から主張を用いられると別の他者に対して主張を用いようとするのかについても検討する。

ただし、先行する葛藤時の経験の効果を検討する際にもやはり、集団に既存の要因についても合わせて検討する必要がある。先述したように、当事者同士の社会的な関係性は、葛藤時に喚起される動機や対処方略に影響することがいくつかの研究で示されており、葛藤の相手との関係性によって、先行する葛藤に対する認識や感情、あるいは後続する葛藤への対処方略の用い方が異なることが予想されるからである。集団において地位の上下関係がある場合、低地位の方が譲歩を用いる傾向があるのに対し、高地位の方が協力や主張を多く用いる傾向があることが示されている（Dant & Schul, 1992; Rahim, 1983）。高地位の方が集団の成果に対して

重い責任を担っているため、自己の意見や考えを尊重することが正当であると見なされやすいためだと考えられる。逆に低地位者が自己の意見や考えに固執するのは、社会的に不適切であると認識されやすい(Van Kleef, 2016)。このことから、相手がリーダーであるなど、自分より高地位の場合、自分がリーダーであるなど、相手より高地位の場合と比較して、主張を用いられても不公平さや腹立たしさは感じにくく、譲歩を用いられると申し訳ないと感じやすくなると考えられる。後続する葛藤時に用いる対処方略もまた、誰がリーダーであるかによって異なると考えられる。

以上を踏まえて本研究では、用いることができる対処方略に制約がある集団内葛藤が連続する状況において、相手からどのような対処方略を用いられたかという先行経験が、その経験に対する認識や感情、および後続する葛藤時に用いる対処方略に及ぼす影響について、後続の葛藤の相手が先行事態と異なる人物であった場合と、同一の人物であった場合との比較を通して検討する。また、他者との葛藤経験時に、リーダーが自分であったか葛藤の相手であったかの効果も併せて検討する。

方 法

実験参加者

大学生136名（男性35名、女性97名、無回答4名、平均年齢20.16歳、 $SD = 4.70$ ）が実験に参加した。実験参加者は以下に示す各条件に無作為に割り当てられた。

要因計画

先行時のリーダー2（自分・相手）×相手の方略2（譲歩・主張）×後続時のリーダー2（自分・相手）の3要因計画であり、いずれも実験参加者間要因であった。実験は場面想定法で行われ、仮想場面を記述したシナリオの内容で、先行時のリーダー、相手の方略、および後続時のリーダーを操作した。

仮想場面にはまず、「あなた」が大学で地域文化について研究するゼミに所属していること、そのゼミでは前期・後期それぞれで、各学年1人がリーダーに任命されることが記述されていた。その際、「あなた」もしくは「同級生のAさん」が前期のリーダーに任命されたと記述することによって、先行時のリーダーが自分か相手かを操作した。

次に、前期にそのゼミの課題で、「あなた」は「同級生Aさん」とペアを組んで、ある地域の文化的な特徴を4つ採り上げて発表することになったこと、その地域の文化的な特徴を示すものには自然、産業、施設、施策などいくつかあり、「あなた」と「同級生のAさん」とで手分けをして調べ、それぞれで候補を考え、後日2人で話し合って発表で採り上げる4つを選ぶ

ことにしたこと、2人とも熱心に調べ、良い候補を考えてきたが、話し合っても結論が出ず、最終的に「同級生のAさん」がどの4つを採り上げるか決めることになったことが記述されていた。その際、「同級生のAさん」の候補から1つ、「あなた」の候補から3つが選ばれた、もしくは「同級生のAさん」の候補から3つ、「あなた」の候補から1つが選ばれたと記述することによって、相手の方略が譲歩か主張かを操作した。

続いて、「あなた」もしくは「同級生のBさん」が後期のリーダーに任命されたと記述することによって、後続時のリーダーが自分か相手かを操作した。その後、後期のゼミの課題で、「あなた」は「同級生のBさん」とペアを組んで、前期とは別の地域について、文化的特徴を4つ採り上げて発表することになったこと、前期と同様に、2人で手分けをして、その地域の文化的な特徴を示すものを調べ、それぞれで候補を考え、後日2人で話し合って発表で採り上げる4つを選ぶことにしたこと、2人とも熱心に調べ、良い候補を考えてきたが、話し合っても結論が出ず、最終的に「あなた」がどの4つを採り上げるか決めることになったことが記述されていた。

なお、仮想場面に登場する人物を示す「あなた」、「同級生のAさん」、および「同級生のBさん」の文字はゴシック体太字で強調された。

従属変数

先行経験に対する認識・感情として、前期に「同級生のAさん」がどの4つを採り上げるか決めた結果を読んだ後に、「同級生のAさん」の行動に対して、「公平である」、「道徳的である」、「満足である」、「申し訳ない」、および「腹が立つ」と感じたかについて、「1.全く感じない」から「5.非常に感じる」の5件法で尋ねた。

後続事態で用いる葛藤対処方略として、後期に「あなた」がどの4つを採り上げるか決めることになったことを読んだ後に、「同級生のBさん」との発表でどの4つを採り上げるつもりかについて、“「あなた」の候補から4つ選ぶ”、“「あなた」の候補から3つ、「同級生のBさん」の候補から1つ選ぶ”、“「あなた」の候補から2つ、「同級生のBさん」の候補から2つ選ぶ”、“「あなた」の候補から1つ、「同級生のBさん」の候補から3つ選ぶ”、および“「同級生のBさん」の候補から4つ選ぶ”の5つの中から1つを選択させた。

先行事態と後続事態とで相手が異なる場合の行動を明確にするためには、同様の状況で相手と同じ場合の行動と比較する必要がある。そのため、もし後期の課題で「同級生のAさん」とペアを組んでいたとしたら、どの4つを採り上げると思うかについて、“「あなた」の候補から4つ選ぶ”、“「あなた」の候補から3つ、「同級生のAさん」の候補から1つ選ぶ”、“「あなた」の候補から2つ、「同級生のAさん」の候補から2つ選ぶ”、“「あなた」の候補から1つ、「同級生のAさん」の候補から3つ選ぶ”、および“「同級生のAさん」の候補から4つ選ぶ”の5つ

の中から1つを選択させた。

操作チェック項目として、「AさんとBさんを別の人物として区別した」、および「場面をうまくイメージできた」について、「1.全く当てはまらない」から「5.非常にあてはまる」の5件法で尋ねた。

手続き

ある大学におけるいくつかの授業の終了後、研究への参加を承諾した大学生に教室に残ってもらい、実験を実施した。実験参加者に実験の流れを説明した後、8種類の仮想場面のうち1つが記述されたシナリオと、従属変数を測定するための質問項目で構成された冊子を配布した。冊子の冒頭には、シナリオの登場人物「あなた」になったつもりで記述された場面をよく読み、その場面を具体的に想像するように記載してあり、それを口頭でも教示した。また、実験参加者はシナリオの登場人物「あなた」であると思って質問項目に回答するように教示した。その後、シナリオの先行事態の部分を読むよう指示し、3分経過後、先行経験に対する認識・感情に関する質問項目への回答を求めた。回答終了後、シナリオの後続事態の部分を読むように指示し、3分経過後、後続事態で用いる葛藤対処方略および操作チェックに関する質問項目、ならびに実験参加者の性別、年齢、所属学部への回答を求めた。最後に、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。

倫理的配慮

本研究は、富山大学人文学部心理学研究倫理委員会の承認を得て（整理番号003）、2023年1月に実施された。研究への参加の依頼に際しては、研究に参加しないことで不利益を被ることはないことを説明し、参加の意思がある場合にのみ教室に残るよう伝えた。また、研究への参加を承諾した者には、回答は匿名化されること、データは厳重に管理され、プライバシーは保護されること、回答内容や回答の中断によって不利益を被ることはないことを説明し、同意した場合にのみ質問調査票に回答するように教示した。

結 果

操作チェック

「AさんとBさんを別の人物として区別した」という項目に2（あまり当てはまらない）と回答した者は6名、1（全く当てはまらない）と回答した者は1名であった。また、「場面をうまくイメージできた」という項目に2と回答した者は1名、1と回答した者は0名であった。これらの実験参加者は、実験者が意図した場面を想定できなかったと判断し、分析対象から除外した。

分析対象全体の「AさんとBさんを別の人物として区別した」への回答の平均値は4.43($SD = 0.66$), 「場面をうまくイメージできた」への回答の平均値は4.20($SD = 0.67$)であった。条件ごとの各項目への回答の平均値をTable 1に示した。これらについて、先行時のリーダー2(自分・相手)×相手の方略2(譲歩・主張)×後続時のリーダー2(自分・相手)の3要因分散分析を行った。

Table 1 各条件の操作チェック項目の平均値

先行時のリーダー 相手の方略	自分				相手			
	譲歩		主張		譲歩		主張	
後続時のリーダー	自分	相手	自分	相手	自分	相手	自分	相手
<i>n</i>	14	17	15	16	16	16	17	17
AさんとBさんを別の人物として区別した								
	4.29	4.35	4.67	4.25	4.38	4.75	4.35	4.41
	(0.70)	(0.59)	(0.60)	(0.56)	(0.60)	(0.43)	(0.76)	(0.77)
場面をうまくイメージできた								
	4.14	4.41	4.47	4.38	3.94	4.13	4.12	4.06
	(0.74)	(0.69)	(0.72)	(0.48)	(0.66)	(0.60)	(0.47)	(0.73)

()内は SD

「AさんとBさんを別の人物として区別した」への回答については、いずれの条件間にも有意な差は認められなかった。「場面をうまくイメージできた」への回答について、相手の方略の有意な主効果のみが認められ($F_{(1, 120)} = 6.074, p < .05, \eta_p^2 = .048$), 主張($M = 4.06, SD = 0.62$)のときより譲歩($M = 4.35, SD = 0.67$)のときに平均値が有意に高かった。

先行事態で相手が譲歩を用いたと想定したときの方が、主張を用いたと想定したときよりも場面をうまくイメージできたと感じられてはいたものの、各条件の平均値から、いずれの条件でも同様に、AさんとBさんとを区別し、シナリオで示された仮想場面をうまくイメージできていたと判断した。

後続事態で用いる葛藤対処方略

「同級生のBさん」との発表で、「あなた」の候補から4つ選ぶ”を選択した場合には1, “あなた”の候補から3つ, 「同級生のBさん」の候補から1つ選ぶ”を選択した場合には2, “あなた”の候補から2つ, 「同級生のBさん」の候補から2つ選ぶ”を選択した場合には3, “あなた”の候補から1つ, 「同級生のBさん」の候補から3つ選ぶ”を選択した場合には4, “同級生のBさん”の候補から4つ選ぶ”を選択した場合には5として、数値が大きいほど用いられた葛藤対処方略が譲歩的、小さいほど主張的であることを示すよう得点化した。また、もし後期の課題で「同級生のAさん」とペアを組んでいたとしたら、どの4つを採り上げると思う

かについての回答についても同様の得点化を行った。これらの得点の条件ごとの平均値を Figure 1 に示した。

これらについて、先行時のリーダー 2 × 相手の方略 2 × 後続時のリーダー 2 × 後続時の葛藤相手 2 (B さん・A さん) の 4 要因分散分析を行った。その結果、相手の方略と後続時の葛藤相手との有意な交互作用が認められた ($F_{(1, 118)} = 48.136, p < .01, \eta_p^2 = .290$)。下位検定の結果、後続時の葛藤相手

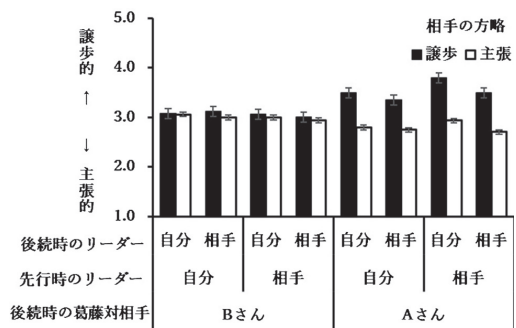
として A さんを想定したとき、相手の方略が譲歩 ($M = 3.53, SD = 0.50$) の方が主張 ($M = 2.80, SD = 0.51$) よりも平均値が有意に高く、譲歩的であった ($F_{(1, 236)} = 103.547, p < .01, \eta_p^2 = .467$)。また、相手の方略が譲歩のとき、後続時の葛藤相手として A さん ($M = 3.53, SD = 0.50$) を想定した方が B さん ($M = 3.06, SD = 0.30$) よりも平均値が有意に高く ($F_{(1, 118)} = 46.314, p < .01, \eta_p^2 = .444$)、譲歩的であり、主張のときには、A さん ($M = 2.80, SD = 0.51$) を想定した方が B さん ($M = 3.00, SD = 0.25$) よりも平均値が有意に低く ($F_{(1, 118)} = 8.840, p < .01, \eta_p^2 = .128$)、主張的であった。

また、後続時のリーダーの有意な主効果が認められ ($F_{(1, 118)} = 4.122, p < .05, \eta_p^2 = .034$)、自分 ($M = 3.18, SD = 0.52$) の方が相手 ($M = 3.04, SD = 0.47$) よりも平均値が有意に高く、譲歩的であった。

先行経験に対する認識・感情

各条件の先行経験に対する認識・感情それぞれの平均値を Table 2 に示した。これらについて、先行時のリーダー 2 × 相手の方略 2 の 2 要因分散分析を行った。

公平である 相手の方略と先行時のリーダーとの有意な交互作用が認められた ($F_{(1, 124)} = 9.180, p < .01, \eta_p^2 = .069$)。下位検定の結果、相手の方略が譲歩のとき、先行時のリーダーが相手より自分のときに平均値が有意に高く ($F_{(1, 124)} = 6.648, p < .05, \eta_p^2 = .100$)、公平であると感じていた。また、先行時のリーダーが自分の場合には、相手の方略が主張よりも譲歩のときに平均



注) エラーバーは標準誤差

Figure 1 各条件の後続事態で用いる葛藤対処方略の平均値

Table 2 各条件の先行経験に対する認識・感情の平均値

先行時のリーダー 相手の方略	自分		相手	
	譲歩	主張	譲歩	主張
<i>n</i>	31	31	32	34
公平である	2.77 (0.97)	2.06 (0.66)	2.23 (0.71)	2.41 (0.91)
道徳的である	3.29 (1.08)	2.13 (0.48)	3.06 (1.19)	2.50 (0.81)
満足である	2.77 (0.97)	2.41 (0.78)	2.71 (0.89)	2.41 (0.81)
申し訳ない	3.55 (1.04)	2.50 (1.20)	3.10 (1.15)	2.12 (1.05)
腹が立つ	1.52 (0.67)	2.53 (0.83)	1.87 (0.91)	2.53 (1.09)

() 内は SD

値が有意に高く ($F_{(1, 124)} = 11.374, p < .01, \eta_p^2 = .157$), 公平であると感じていた。

道徳的である 相手の方略と先行時のリーダーとの交互作用に有意傾向が認められた ($F_{(1, 124)} = 3.243, p < .10, \eta_p^2 = .025$)。下位検定の結果, 先行時のリーダーが自分の場合も相手の場合も, 相手の方略が主張のときより譲歩のときに平均値が高い傾向にあり ($F_{(1, 124)} = 24.048, p < .01, \eta_p^2 = .283$; $F_{(1, 124)} = 5.812, p < .10, \eta_p^2 = .084$), 道徳的であると感じる傾向にあった。

満足である 相手の方略の有意な主効果のみが認められ ($F_{(1, 124)} = 4.586, p < .05, \eta_p^2 = .036$), 主張 ($M = 2.41, SD = 0.80$) のときより譲歩 ($M = 2.74, SD = 0.93$) のときに平均値が有意に高く, 満足であると感じていた。

申し訳ない 相手の方略の有意な主効果のみが認められ ($F_{(1, 124)} = 25.787, p < .01, \eta_p^2 = .172$), 主張 ($M = 2.30, SD = 1.14$) のときより譲歩 ($M = 3.32, SD = 1.12$) のときに平均値が有意に高く, 申し訳ないと感じていた。

腹が立つ 相手の方略の有意な主効果のみが認められ ($F_{(1, 124)} = 27.290, p < .01, \eta_p^2 = .180$), 譲歩 ($M = 1.69, SD = 0.81$) のときより主張 ($M = 2.53, SD = 0.97$) のときに平均値が有意に高く, 腹が立つと感じていた。

先行経験に対する認識・感情と後続事態で用いる葛藤対処方略との関連

先行経験に対する認識や感情が, 後続事態で用いる葛藤対処方略に及ぼす影響を検討するため, 後続事態時の葛藤相手がBさんの場合に用いる対象方略, Aさんを想定した場合に用いる対処方略それぞれを基準変数, 先行経験に対する認識・感情の各変数を説明変数として, 強制投入法による重回帰分析を行った。その結果を Table 3 に示した。

Table 3 後続事態時で用いる葛藤対処方略を基準変数とした重回帰分析の結果

後続時の葛藤相手	Bさん	Aさん
公正である	-.024	-.077
道徳的である	.124	.207 *
満足である	.169	.189 +
申し訳ない	.043	.029
腹が立つ	.085	-.233 *
R^2	.047	.240 **

表中の数値は標準偏回帰係数 (β)

** $: p < .01$ * $: p < .05$ + $: p < .10$

後続事態時の葛藤相手がBさんの場合に用いる対処方略に対しては, いずれの説明変数からも有意な影響は認められなかった。後続事態時の葛藤相手にAさんを想定した場合に用いる対

処方略に対しては、「道徳的である」から有意な正の影響が、「満足である」からの正の影響に有意傾向が、「腹が立つ」から有意な負の影響が認められた。すなわち、後続事態の葛藤相手も先行事態と同一のAさんであれば、先行経験を道徳的である、あるいは満足であると感じるほど、用いる葛藤処方略は譲歩的になり、「腹が立つ」と感じるほど主張的になっていた。

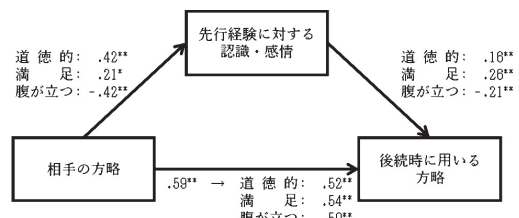
また先行経験が、それに対する認識・感情によって媒介され、後続事態で用いる葛藤処方略に及ぼす効果を検証するため、後続事態時の葛藤相手にAさんを想定した場合に用いる処方略に有意あるいは有意傾向の影響を及ぼ

していた「道徳的である」、「満足である」、および「腹が立つ」を媒介変数とする媒介分析を行った。その結果をFigure 2に示した。

先行時の相手の方略が主張の場合を1、譲歩の場合を2とするダミー変数を割り当てたところ、後続事態の相手がAさんの場合に用いる処方略に対する有意な正の直接効果が示された。また、先行時の相手の

方略は「道徳的である」および「満足である」に対して有意な正の効果、「腹が立つ」に対して有意な負の効果を示した。「道徳的である」の間接効果 β は.07 (Sobel test: $z = 1.93, p < .10$), 「満足である」は.06 (Sobel test: $z = 2.01, p < .05$), 「腹が立つ」は.09 (Sobel test: $z = 2.35, p < .05$)であり、いずれを媒介した場合でも、先行時の相手の方略から後続事態に用いる処方略への直接効果は有意なままであった。

Figure 2 先行経験に対する認識・感情の媒介効果



図中の数値は標準偏回帰係数 (β) * : $p < .05$, **: $p < .01$

考 察

本研究の目的は、用いることができる処方略に制約がある集団内葛藤が連続する状況において、相手からどのような処方略を用いられたかという先行経験が、その経験に対する認識や感情、および後続する葛藤時に用いる処方略に及ぼす影響を検討することであった。

後続事態時に用いる葛藤処方略

集団における他者との葛藤に際して、相手から主張的な方略を用いられる経験をするよりも、譲歩的な方略を用いられる経験をする方が、後に同じ相手と同様の葛藤が生じたときに譲歩的な方略を用いようとしていた。しかし、後の葛藤の相手が異なる場合には、先にどのような処方略を用いられる経験をするかによって、後の葛藤の相手に用いる処方略に違いは見られ

なかった。また、相手から譲歩的な方略を用いられる経験をした場合、後に同様の葛藤が異なる相手と生じたときよりも、同じ相手と生じたときの方が譲歩的な方略を用いようとしていた。逆に、相手から主張的な方略を用いられる経験をした場合には、後に同様の葛藤が異なる相手と生じたときよりも、同じ相手と生じたときの方が主張的な方略を用いようとしていた。

すなわち、集団において、他者との間に課題に関わる葛藤が生じたとき、相互作用による利害や報酬の獲得・損失が明確には存在しないとしても、相手に主としてこちらの意見や考えを尊重された経験をする、後に再び同じ相手と葛藤が生じたときに、今度は相手の意見や考えを尊重しようとし、逆に相手に主として相手自身の意見や考えを尊重された経験をする、後に再び同じ相手と葛藤が生じたときに、今度はこちらの意見や考えを尊重しようとするのが示唆された。他者との葛藤に際し、相手と良い関係を維持したいという目標が喚起されると他者尊重的な方略を、自由、プライバシー、自律性を維持したいという目標が喚起されると自己尊重的な方略を用いようとするのが示唆されている（大淵・福島，1997）。相手からこちらの意見や考えを尊重されると、その相手との関係を良好に保ちたいという目標が喚起され、相手の意見や考えを尊重しようとし、こちらの意見や考えを尊重される程度が低くなると、自由や自律性を維持したいという目標が喚起され、自分自身の意見や考えを尊重しようとしたのではないかと考えられる。また、人は「自分に利益をもたらしてくれた相手には利益を与えるべきであり、損害をもたらしてはいけない」との規範を有していると考えられている（Gouldner, 1960）。先行事態と後続事態とで葛藤の相手が同一のときにはこのような規範も作用し、互報的に振る舞おうとする意図が強かったのだと考えられる。

一方、後に葛藤が生じた相手が先の葛藤の相手とは異なる場合、どちらの意見や考えが主に尊重されたかという先の経験によって、後に生じた葛藤にどのように対処するかは差異は見られず、自分と相手の意見や考えを同程度尊重する妥協的な方略が用いられていた。報酬分配状況や援助提供状況で利得や損失を経験すると、人は特定の2者間でだけでなく、複数の関係で帳尻を合わせることで不均衡の解消を試みることが示唆されている（Austin & Walster, 1975; 中島・吉田，2008）。しかし、集団課題に関わる他者との間の意見や考えの相異の調整や集約のような状況には、明確な利得や損失は存在せず、ある他者との相互作用で自分の意見や考えが尊重された、あるいはされなかったとしても、別の他者との相互作用によって衡平を回復しよう意識されなかったのではないかと考えられる。

集団においては、低地位者は譲歩を、高地位者は主張を多く用いる傾向があることが示されており（Dant & Schul, 1992; Rahim, 1983）、自分がリーダーであるときの方が主張的な方略を用いようとするが推測された。しかし、後に葛藤が生じたときに、相手がリーダーであるよりも、自分がリーダーである方が譲歩的な方略を用いようとしていた。困難な課題に取り組んでいる集団においてリーダーとフォロワーとの間に葛藤が生じたとき、課題志向的なリーダーは譲歩

的な方略を用いる傾向も強めることが示唆されている（黒川，2012）。資源や時間に制約がある困難な状況で課題を完遂するためには、自分の意見や考えの正当性や妥当性を説く時間が十分にはなく、そのためリーダーはフォロワーの意見や考えのみを尊重することも必要だと考えたのだと考えられる。リーダーとして正解や望ましい選択が明確ではない課題に取り組んでいるときにも同様に、高い成果を上げるために譲歩的な方略を用いることも必要であると感じたのではないかと考えられる。

先行経験に対する認識・感情

他者との葛藤に際して、自分がリーダーのときの方が、相手がリーダーのときよりも、相手から譲歩的な方略を用いられた経験を公平であると感じていた。また、相手がリーダーのときには、相手から譲歩的な方略を用いられても、主張的な方略を用いられても、公平であると感じる程度に違いはみられなかったが、自分がリーダーのときには、相手から譲歩的な方略を用いられた方が、主張的な方略を用いられるより公平であると感じていた。すなわち、集団において、他者との間に課題に関わる葛藤が生じたとき、その相手が自分より上位者である場合には、主としてどちらの意見や考えが尊重されたかによって、その経験が公平であると感じる程度に違いはないが、自分の方が上位者である場合には、主としてこちらの意見や考えが尊重されないと、その経験が不公平であると感じることが示唆された。

地位の上下関係がある場合、下位者は上位者に服従的であることが望ましいという意識が強いことが示唆されている（新井・松井，2003）。自分が上位者であるリーダーの場合には、相手は自分の意見や考えに従うのが望ましいという意識が生じ、相手が意見や考えを取り下げないときには、不公平さを感じたのではないかと考えられる。一方、相手が上位者であるリーダーの場合には、どちらの意見や考えが尊重されたとしても、相手の判断に従っていることになるため、公平さの感じ方に違いがなかったのではないかと考えられる。

また、他者との葛藤の際に、相手から譲歩的な方略を用いられた方が、主張的な方略を用いられるよりも、その経験を道徳的であり、満足であり、申し訳ないと感じており、腹が立つと感じる程度は低かった。すなわち、リーダーが自分であるか相手であるかに関わらず、相手が主としてこちらの意見や考えを尊重してくれることは道徳的であると感じ、そのような経験に満足する一方、申し訳ないとも感じるが、こちらの意見や考えが尊重されないことは非道徳的で不満足な経験であり、腹立たしく感じることを示唆された。

他者との葛藤状況では、公正判断が自分に有利な方向に歪められやすいことが示唆されている（Thompson & Loewenstein, 1992）。両者の意見や考えを統合することができない葛藤状況では、自分の意見や考えが相手よりも尊重されたときに公正であると認識され、道徳的な行為であり、満足をもたらす行為として捉えられたのではないかと考えられる。また、他者から向社会的行

動を受けると、感謝とともに申し訳ないという気持ちが生起することが示唆されている(蔵永・樋口, 2011)。こちらの意見や考えを尊重される経験は感謝の対象となると考えられるのだが、申し訳ないという感情も共起させたのではないかと考えられる。一方、非道徳性が高いなど社会的に不適切だと判断される行為は、ネガティブな感情反応を引き起こしやすいことが示唆されている(Van Kleef, 2016)。こちらの意見や考えが尊重されない経験の非道徳性が高く認識され、それに伴って腹が立つと感じたのではないかと考えられる。

先行経験に対する認識・感情と後続事態で用いる葛藤対処方略との関連

後に生じた葛藤の相手が先の葛藤の相手とは異なる場合、先行経験に対する認識や感情は、後に生じた葛藤にどのように対処するかに影響していなかった。一方、後の葛藤の相手が先行時と同じ場合には、先行経験を道徳的であると感ずるほど、あるいは満足であると感ずるほど譲歩的な方略を用いようとし、腹が立つと感ずるほど主張的な方略を用いようとしていた。

他者との葛藤の際に相手が主としてこちらの意見や考えを尊重してくれたときには、その経験を道徳的で満足であると感ずており、相手がこちらの意見や考えを尊重してくれなかったときには腹が立つと感ずていたことから、先に生じた葛藤と後の葛藤の相手が同じ場合の、先行する葛藤時の経験と後続する葛藤時に用いる対処方略との関連には、先行経験に対する認識や感情が媒介していることが推測された。しかし、その媒介効果は弱いものであった。また、先行経験に対する認識や感情が後の同じ相手との葛藤に用いる対処方略に及ぼす効果は、先行経験そのものの効果と比較して、相対的に弱いものであった。

本研究の課題と効用

本研究では、集団で課題に取り組んでいるときに生起するメンバー間の葛藤を想定し、その際に用いられる対処方略を規定する要因として先行する同様の葛藤経験を取り上げた。しかし、想定された場面で相互作用している人物は2名のみであった。そのため、本研究で測定された指標には、集団のメンバーとしての反応だけでなく、対人行動としての反応も含まれている可能性がある。リーダーについても、その権限や責任は明確に示されておらず、リーダーとしての反応の程度が低かった可能性がある。

また、他者との葛藤が同一の集団内で続けて生じた状況を設定していたものの、先行事態と後続事態とは集団が取り組む課題は独立しており、後続の葛藤の相手が異なる場合には、先行事態と後続事態とで関与するメンバーが異なっていた。シナリオに登場する人物はすべて同一の集団に所属してはいたが、先行事態と後続事態とが一連の集団過程として捉えられていなかった可能性もある。

さらに、先行して経験した葛藤は1回のみであり、そのインパクトは大きくなかった可能性

もある。これらのことが原因となって、先行経験が後続の葛藤時の行動に及ぼす影響が総じて抑制された可能性は否定できない。本研究では、先行事態の葛藤相手と後続事態の葛藤相手とを区別していなかった参加者のデータを分析から除外したが、数多くの葛藤を経験し、先行して経験した葛藤の相手と眼前の葛藤の相手とを区別しなくなったときにこそ、先行経験のインパクトが大きくなると推測される。

以上のような課題はあるものの、本研究から得られた知見をまとめると以下のとおりである。まず、集団において、他者との間の明確な資源の交換を伴わない課題に関わる葛藤状況では、相手から譲歩的な方略を用いられる経験をする、同じ相手との葛藤には譲歩的な方略を、相手から主張的な方略を用いられる経験をする、同じ相手との葛藤には主張的な方略を用いようとする。しかし、後に生じた葛藤の相手が先の葛藤の相手とは異なるときには、相手からどのような方略を用いられる経験をするかに関わらず、両者の間を取る妥協的な方略を用いようとする。また、自分がリーダーであるときに他者との葛藤が生じると、相手からどのような方略を用いられる経験をするかに関わらず、譲歩的な方略を用いようとする。次に、自分がリーダーであるときに相手から譲歩的な方略を用いられる経験をする、その経験を公平であると感じ、主張的な方略を用いられる経験をすると不公平であると感じるが、相手がリーダーであるときには、相手からどのような方略を用いられる経験をするかによって不公平感に違いはない。また、リーダーが誰であるかに関わらず、相手から譲歩的な方略を用いられる経験は道德的であると感じ、そのような経験に満足する一方、申し訳ないとも感じ、相手から主張的な方略を用いられる経験は非道德的で不満足な経験であり、腹立たしく感じる。以上のことが示唆された。

謝 辞

本研究はJSPS科研費JP20K03309の助成を受け行われた。

引用文献

- 新井 洋輔・松井 豊 (2003). 同年輩の他者に対する上下関係意識の比較基準と行動・感情 対人心理学研究, 3, 23-28.
- Austin, W., & Walster, E. (1975). Equity with the world: The trans-relational effects of equity and inequity. *Sociometry*, 38, 474-496.
- Baron, R. A., Fortin, S. P., Frei, R. I., Hauver, L. A., & Shack, M. L. (1990). Reducing organizational conflict: the role of socially-induced positive affect. *International Journal of Conflict Management*, 1, 133-152.

- Blake, R. R., & Mouton, J. S. (1964). *Managerial grid*. Houston, TE: Gulf.
- (ブレイク, R. R. & ムートン, J. S. 上野 一郎 (訳) (1965). 期待される管理者像 産業能率大学出版部)
- Burk, R. J. (1970). Models of resolving superior-subordinate conflict: The constructive use of subordinate differences and disagreements. *Organizational Behavior and Human Performance*, 5, 393-411.
- Dant, R. P., & Schul, P. L. (1992). Conflict resolution processes in contractual channels of distribution. *Journal of Marketing*, 56, 38-54.
- 福島 治・大淵 憲一・小嶋 かおり (2006). 対人葛藤における他目標—個人資源への関心, 評価的観衆, 及び丁寧さが解決方略の言語反応に及ぼす効果— 社会心理学研究, 22, 103-115.
- Gouldner, A. W. (1960). The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- 平井 美佳 (2000). 問題解決場面における自己と他者の調整 教育心理学研究, 48, 462-472.
- 本田 周二 (2012). 友人関係における動機づけが対人葛藤時の対処方略に及ぼす影響 パーソナリティ研究, 21, 152-163.
- Ketelaar, T., & Au, W. T. (2003). The effects of feelings of guilt on the behavior of uncooperative individuals in repeated social bargaining games: an affect-as-information interpretation of the role of emotion in social interaction. *Cognition and Emotion*, 17, 429-453.
- 蔵永 瞳・樋口 匡貴 (2011). 感謝の構造—生起状況と感情体験の多様性を考慮して— 感情心理学研究, 18, 111-119.
- 黒川 光流 (2012). リーダーの管理目標および課題の困難度がリーダー—フォロワー間葛藤への対処方略に及ぼす影響 実験社会心理学研究, 52, 1-14.
- Leng, R. J. (1993). Reciprocating influence strategies in interstate crisis bargaining. *Journal of Conflict Resolution*, 37, 3-41.
- Likert, R., & Likert, J. G. (1976). *New ways of managing conflict*. New York, NY: McGraw-Hill.
- 中島 誠・吉田 俊和 (2008). 日常生活における第三者を介した資源の衡平性回復行動 社会心理学研究, 24, 98-107.
- Nemeth, C. J., Personnaz, B., Personnaz, M., & Goncalo, J. A. (2004). The liberating role of conflict in group creativity: A study in two countries. *European Journal of Social Psychology*, 34, 365-374.
- 大淵 憲一・福島 治 (1997). 葛藤解決における多目標—その規定因と方略選択に対する効果— 心理学研究, 68, 155-162.
- Rahim, M. A. (1983). Managing organizational conflict: A model for diagnosis and intervention. *Psychological Reports*, 44, 1323-1344.
- Ross, L., & Stilling, C. (1991). Barriers to conflict resolution. *Negotiation Journal*, 8, 389-404.
- Shure, G., Meeker, R., & Hansford, E. (1965). The effectiveness of pacifist strategies in bargaining games. *Journal of Conflict Resolution*, 9, 106-117.
- Thomas, K. (1976). Conflict and conflict management. In M. D. Dunnette(Ed.), *Handbook of industrial and organizational psychology*. Chicago, IL: Rand McNally.
- Thompson, L. L., & Loewenstein, G. (1992). Egocentric interpretations of fairness and interpersonal conflict. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 47, 98-123.
- Van Kleef, G. A. (2016). *The Interpersonal Dynamics of Emotion: Toward an Integrative Theory of Emotion as Social Information*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

